

## 第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

今ここにある家族の笑顔

滋賀県 東近江市立能登川中学校 一学年

丸田 瑠菜

私の父は、大型トラックの運転手です。

父のトラックは、内装を装飾し、高級なシャンデリアまでつけ、外観は電飾でイルミネーションのように光り輝いています。これが父の自慢のトラックです。

今から一年前の父は、

「トラックの中は、男の城。」

と口癖のように言い、朝の四時から夜の一時まで働き、まるで化物のような父親でした。そんな父の姿を見て母は、

「無事に帰ってこれるかな。」

と毎日不安そうに言っていました。私もそんな父の身体がとても心配でした。

そんな時、家族でテレビを観ていると、生命保険のコマーシャルが流れました。私は、ふと父に、

「そういうえば、お父さんって、生命保険入ってる？」

と聞いてみました。すると父は、

「俺の身体は弱くないから、生命保険なんて入る必要ないかな。」

と軽く答えていました。私は、父がそう言うなら、生命保険なんて入らなくていいかなと思いました。でも母は、

「いつ身体を壊すかわからないし、事故だっけするかもしれないし、入った方がいいんじゃない？」

と、言いました。家族全員、母の意見に賛成しました。そして、家族で話し合った結果、父は生命保険に加入することになりました。父のことを考えると、私は少し安心しました。

そして、父が生命保険に加入して、半年後のある日。母の携帯に一本の電話がかかってきました。それは、父が仕事で倒れて病院に運ばれた、という病院からの電話でした。すぐに病院に行き、話を聞くと、父は仕事中に心筋梗塞で倒れ、救急車で運ばれたそうです。父は病院に運ばれると、一度心臓が止まりましたが、電気ショックで一命を取り留めました。家族で話している時も、私たちは、不安の気持ちで、胸が張り裂けそうでした。それから父は、しばらく目

## 第55回中学生作文コンクール

を覚ましませんでした。

「このままお父さんが死んじゃったら、私たちはどうなるのかな……。」

この時、母は仕事をしていなくて、父の収入だけで生活していたため、父がいなくなったら生活に困るので、ただただ不安でいっぱいでした。

父が入院して五日後。父の意識も戻り、やっと父と会話ができるようになりました。久しぶりに話をしていると、父が、

「生命保険、やっぱり入ってて良かったね。」

とニコリと笑いながら言いました。私は父のその言葉に共感しました。そして私は、父の入院で生命保険の有り難みを知りました。

現在、父は仕事の量を減らし、身体に負担のかからない仕事をするように心がけています。以前は夜遅くまで働いていた父に、

「おかえり。」

という言葉が言えませんでした。父は仕事を終える時間が早くなったため、今では毎日言えるようになりました。

私の家族は全員生命保険にも入り、毎日笑顔で溢れています。今でも、父が意識を取り戻した時の家族の笑顔が心の奥底に残っています。今の家族の笑顔が私の側にあるのは、“生命保険”という存在があるからだと思います。